
谷口森俊* フィリッピン・マタ
ブンカイ海岸の海藻群落**

Moritosi TANIGUTI: Marine Algal Community of Matabungkay, Philippines

1968年1～2月筆者はフィリッピン共和国に海外出張したので、その機会に同国のマタブンカイ Matabungkay 海岸の潮間帯海藻群落を調査した。マタブンカイ海岸はフィリッピン、ルソン島の南部、バタンガス Batangas 半島の先端にあり、南支那海に面した外洋沿岸で純然たる熱帯である。はるか南西沖にはミンドロ Mindoro 島が見られる。

調査の対象とした所は、このマタブンカイ海岸の中部一帯のサンゴ礁上とその南にあるマングローブ（紅樹林）地帯である。まずサンゴ礁上の植生について述べるならば次のようである。

海岸は砂浜につづきサンゴ礁となっているが、このサンゴ礁の巾つまり礁縁までの距離は約500mである。そして礁上には大小のくぼみがあることは勿論であるが、大きいタイド

-
- * 三重県立大学水産学部 Faculty of Fisheries, Prefectural University of Mie, Tsu City, Japan
 - ** 本研究は昭和42年度三重県立大学海外出張費による研究の1部であり、その要旨は日本植物学会第33回大会（1968 熊本）で報告した。

ブルはなかった。砂浜寄りの礁上には大小のリュウキュウスガモがかなり多く、リュウキュウスガモ帯を形成していた。これに引続いたサンゴ礁上にはカゴメノリ(2)、キツコウグサ(1)、アオノリ(+), フデノホ(+), バロニア(+), センナリツタ(+), *Sargassum* sp. (コブクロモク?) (+), *Corallina* sp. (1)が見られた。海藻はいずれも量的に少なく、海藻帯を形成するまでには至らない。

次にサンゴ礁中央部になると、コナウミウチワ(3)、シラモ(1)、ガラガラ(+), ヨレツタ(+), タカノハツタ(+), ヒヤクシンソツタ(+), フデノホ(+)が認められた。礁縁近くなると *Sargassum* sp. がやや目立つようになる。そのほかセンナリツタ、ツナサボテングサ、フクロノリ、ヌルハダ、ラツパモク等も僅かに見られた。

次に南隣りの砂泥地に広い面積を占めているマングローブ林を調査した。支柱根はなくヤエヤマヒルギのようである。小さい幼木も無数に泥上に生えている。これらをかなり詳しく調べてみたが、海藻らしいものは、ついに全く認められなかった。なおここにはクロモヒトデが多かった。

調査の結果は以上のようなことが言える。結局このサンゴ礁上では岸寄りの所から礁縁にかけてリュウキュウスガモ帯→コナウミウチワ帯→*Sargassum* 帯の帯状分布が形成されていることが明らかとなった。海藻群落の立場からはコナウミウチワ—*Sargassum* 群落が分布しているといえよう。しかし海藻の種類、量ともに少ないことと、コナウミウチワ帯、*Sargassum* 帯いずれも密な帯を形成しているわけではない。全般的にはやや貧困な植生といえよう。相観型¹⁾は褐色—褐色型で外洋性群落のタイプである。緑藻類もマユハキモを除いて顕著ではない。この点は琉球列島等亜熱帯の植生とは全く違う。沖縄のカゴメノリ帯はここでは貧弱となって垂直的に上っている。要するにこの熱帯のフィリッピン・マタブンカイ海岸のサンゴ礁海藻植生は奄美大島、沖縄、宮古島、石垣島等の亜熱帯植生とは全く異質のものであり、そして植生そのものも貧困であるといわざるをえない。礁縁より深い所すなわち漸深帯については調査しなかった。

それからマングローブ地帯には海藻らしきものは全くなく、従ってマングローブ地帯特有の海藻群落を認めることは出来なかった。マングローブの海藻植生は熱帯地方の1特徴であるが (POST, SETCHELL), ここでは残念ながらこれが認められなかった。

本研究につき御指導御援助を賜った三重県立大学長石部修先生に厚く感謝する。また現地調査で色々御世話になったフィリッピン大学植物学教授 VELASQUEZ 博士, 同助教授 TRONO 博士, 同研究生 PAGGAG 嬢に深く御礼申し上げる。

参 考 文 献

- 1) 谷口森俊 1962. Phytosociological Study of Marine Algae in Japan. 1-130. 井上書店, 東京.
- 2) VELASQUEZ, T. 1966. The Marine Algae of Palawan, Philippines. Proc. 11th Pacific Science. 7 : 12.
- 3) 谷口森俊 1970. フィリッピン・マニラ湾の海藻群落. 北陸の植物, 18 : 34-35.

Summary

The intertidal zonation of the marine algae along the coast of Matabungkay, Philippines, was studied. The field work was carried out in February 1968. As the results of the investigations, there were found, from above downwards, the *Padina crassa* belt and the *Sargassum* belt between the tide-marks. And there was recognized the marine algae, such as *Hydroclathrus clathratus*, *Dictyosphaeria cravernosa*, *Neomeris annulata*, *Valonia utricularis*, *Caulerpa racemosa* var. *clavifera*, *Gracilaria compressa*, *Galaxaura fastigiata*, *Caulerpa freycinetii* var. *typica*, *Caulerpa sertularioides*, *Caulerpa cupressoides*, *Colpomenia sinuosa*, *Liagora mucosissima*, *Turbinaria ornata*, *Halimeda tuna* f. *typica*, etc. in those belts. The physiognomic type of this community belongs to the Brown-Brown type (TANIGUTI, 1962), which is a type of the open-sea community.

The author expresses his heartfelt thanks to Dr. VELASQUEZ, Prof. of Botany, Dr. TRONO and Miss PAGGAO at the University of Philippines, for their guidance and help throughout the course of this work.
